獣医さんのお仕事 in異世界7

蒼空チョコ Choco Aozora

アルファポリス文庫

http://www.alphapolis.co.jp/

Main
主な登場人物
Characters

タマ
風見が仲間にした、
アースドラゴン。

クイナ
隷属騎士団に所属する
ウェアキャットの少女。
最近、風見に懐き
はじめていて……

キュウビ
幻術を得意とする、
人間と妖狐のハーフ。
実は二代目猊下の娘。

セラ
隷属騎士団の団員。
リズをお姉様と慕う
ウェアラビットの少女。

クロエ
ハドリア教の神官にして、
風見の付き人。
清純で勤勉な乙女だが、
信仰心が強すぎて、
時々ナナメ上の
言動をする。

リズ
奴隷によって構成される
戦闘集団
「隷属騎士団」の元団長。
厳しいことをよく言うが
実は子供好き。

風見心悟（かざみしんご）
ラノベやアニメを嗜（たしな）む、
公務員獣医さん。
ひょんなことから異世界に
召喚され、その世界に
生きるもの達を救うべく奮闘中。

プロローグ

五代目マレビト風見心悟が、レッドドラゴンの棲まう竜の巣を出立した翌日未明。辺境伯ドニ・アスト・ラヴァンが治めるハイドラの街に、一頭の飛竜が飛来した。

その手綱を握るのはウェアキャットの少女クイナだ。リズがクイナを補助し、クロエは飛竜の背から飛び降りる準備をしていた。風見とキュウビは別行動中で、街の東に位置する国境線の砦へ向かっている。東国エンルスがここアウストラ帝国への侵攻を始めたため、二人は砦に先行したのだ。

通常ならば飛竜は街の外に着陸させるところだが、今回はその時間も惜しい。一行は速度も緩めず、街に低高度で進入した。

頭上を過る巨大な影を見た市井の人々は、飛竜に襲われると勘違いし、盛大に悲鳴を上げる。

「やれやれ。こんな騒ぎが突然起こったら、隷属騎士としては卒倒ものだね。私が団長をしている時じゃなくてよかった」

以前隷属騎士団の団長だったリズは、肩を竦める。せめて街の警備には事情を伝えようと、彼女は隷属騎士が情報伝達に用いる犬笛を吹き鳴らした。

『元団長より皆へ。我が主は目的地より帰還した。支度をしたあと、戦地に向かう』

このような簡潔なメッセージだが、隷属騎士が聞けば状況は推測できるだろう。この飛竜も敵ではないとわかるはずだ。

キュウビと共にアースドラゴンのタマに跨った風見は、リズたちに先んじて戦地へ向かう際に言っていた。

――こんな時のために今まで準備をしてきた。この街で掻き集められるだけの医療道具を持って、すぐにあとを追ってこい、と。

風見がこの世界に来て用意してきたものは、薬のみならず、縫合糸や注射針まである。けれど彼の姿を傍で見てきたリズやクロエからすれば、あれこれと医療道具の名を聞くまでもない。生産拠点が街のどこにあるかも、熟知していた。

クロエは飛竜から飛び降りる用意ができると、リズとクイナに声をかける。

「私は教会に行って、抗生物質ができているか確かめてきます。二人は他をお願いしますね」

「はいはい、シンゴの息がかかった商人やら製造業者から、治療道具をありったけ巻き上げてくればいいんだろう？　大したことでもないよ」

リズが軽く頷くのを見てから、クロエは街に飛び降りた。高度が屋根すれすれとはいえ、普通ならば飛行の勢いのまま地面に激突して大事故になるだろう。

しかしながらクロエは、地面を転がるようにして落下の衝撃を受け流し、着地した。そのまますぐに走り出し、教会に向かっていく。リズはそれを横目で見送った。

そしてリズは、物思いにふける様子で黙り込む。覆いかぶさるような格好でリズに手綱繰りを補助されているクイナは、リズの気が漫ろになっているのを肌で感じ取った。

普段のリズなら、人斬りの機会を前にうずうずしていそうなものだ。なのに今の彼女は真逆のテンションである。心配したクイナは、その理由を尋ねてみる。

「あの。団長、何かあったんですか……？」

「ん？　いや、別に。単に気になっただけだよ。どこかの誰かさんが、まーた無理をするんだろうなってね」

名指しされなくともわかる。リズがこんな風に言う相手は、風見くらいだ。

しかし、クイナには彼女が言わんとしていることの真意がわからない。一体、いつ風見が無理をしていたのだろうかと疑問顔だ。

そんなクイナの顔を、リズはクロエを見送った時と同様、感情の薄い表情で見やる。

「戦争に駆り出される弱者を救うために最前線に行くなんて、クロエが好きそうな英雄的所業だ。普段ののんびりした様子からは想像できないことをして、結局はどうにか戦

争をおさめるだろうさ。ただね、あれはそんなことを何の苦もなくこなせるほど特別かな？　そんなわけがない。律法さえ使えない、ただの人間だ。……だったら、一体どんな無理をしてその成果を掴み取っているのかな、と変なことを考えていただけだよ」

きっと、気にしても仕方がないことだ。風見がしていることは誰に強制されたわけでもなく、本人の意思によるもの。風見という人の性分なのだ。

それがわかっているからこそ、余計にリズの胸はもやもやしている。

しかしクイナは、風見のことを特別な――それこそ、伝説そのもののような存在と思いはじめていた。そのため、リズの言葉が不意の一撃のごとく重く感じられる。

手綱を持つクイナの手の力が緩みかける。リズはぐっと強くそれを手繰った。

「そろそろ私たちの目的地だ。降りたら早々に飛竜へ荷物を括りつけるよ」

「はっ、はい……！」

今のクイナには、リズの言葉を深く気にする時間はない。彼女らはすぐに近場の工場に着陸し、風見が流通させた医療道具を飛竜に載せはじめたのだった。

第一章　誰かがそう呼びました

砦は、戦場と化していた。ここは、敵国エンルスとの国境に位置し、アウストラ帝国が東からの侵攻を抑えるための最大の要所となっている。

この砦にいる正規騎士は約二百名。砦に常勤している隷属騎士が六百名と、ハイドラから派兵されてきた隷属騎士が百名。近隣の街に駐屯する兵士と、農民の兼業をしている一般兵が千名。各街々から集められた農民の非正規兵が二千名。総計約四千名がこちらの総戦力となる。

対して、敵は二万もの兵だ。五倍の数にもなる敵の軍勢は、砦から矢が届かない距離で陣形を組んでいる。彼らが整列を終えれば、また今日の戦闘が始まるだろう。

雄叫びが飛び交う戦闘を目前に控え、砦は静寂に包まれていた。

ただの静けさとはわけが違う。砦の中の雰囲気は絶望に満ちていて、生気が感じられない。実際、この場にいる人間の大半は、死んだ魚のような目をしていた。

砦を守る兵は、それぞれの持ち場で重く口を閉ざし、座り込んでいる。

彼らは皆、大小の傷を負っていた。どこを見回しても無傷の者はおらず、多くはぼ

うっと地面を見つめている。

彼らは長い戦闘のせいで疲労困憊している。生半可ではないこの疲れを抱えたまま眠りに落ちれば、体は死んだように休息を求めてしまう。そのせいで立ち上がれなくなると困るので、寝るに寝られないのだ。

そんな中で動いている者といえば補給要員の少数と、怪我人に止血のための包帯を巻くことしかできない衛生兵。それから――近隣から駆り出された子供だ。

「何をやっているか。さっさとそれを片付けてこい！」

「あぐっ……！」

ふんぞり返る正規騎士に蹴り飛ばされたのは、遺体を前にした少年だった。

彼らの仕事は、敵味方を問わず遺体から装備を回収すること。そして、邪魔な遺体を砦の外へ運び出すことだ。武器や防具を外すだけならともかく、遺体に刺さった矢の回収なんて心身共に辛い仕事である。子供の力では回収も運び出しも容易ではない。

それに音を上げて少しでも休んだり、へまをしたりした途端に、正規騎士が暴力を振るうというわけだ。

こちらの数倍にもなる敵の軍勢を受け止めるには、士気が全く足りていない。

補佐と共に砦を見て回っていた偉丈夫は、この有り様に対し、険しい表情を作った。

「砦の両脇を山に守られているとはいえ、油断は禁ずる。律法士の脅威は心得ておろう？　少数でも見逃して砦への侵入を許せば、食らいつかれるぞ」

律法士は数百人に一人の才能と言われ、数は少ない。その一方で、奇襲や要所の破壊工作など、適切に運用すれば兵士数十人分どころか、戦況をひっくり返す働きすら可能である。敵側にいれば、一人二人でも侮れない。そのことを重々承知している補佐は、しかと返答した。

「承知しています。周囲の山にも網を張り、警戒を怠っていません」

「うむ」

頷いた偉丈夫ディランは、この砦の隷属騎士を取り仕切る団長だ。

隷属騎士と民間人の指揮をおこなうのは、正規騎士ではなく、彼だ。上流階級出身の正規騎士は、成果をかっさらうだけのお飾りである。

侵攻を受けて数日、この砦が健在なのは、ひとえにディランの手腕による。だが、その手腕を振るうにも条件が厳しすぎた。決定的な人員不足に、ディランと補佐は表情を曇らせる。

「リズ殿がいないのが悔やまれます。『地獄の番犬』とも呼ばれ恐れられた彼女がいれば、こちらからも斬り込んでいけたでしょうに。こうも防戦一方では……」

「いない者を当てにするのはやめよ。敵軍には元より兵糧が少ない。我らにできるのは、奴らの兵糧が尽きるまで耐えることだ」

「それまで持てばいいのですが」
「……難しいであろうな。もってあと二戦だ。しかしそれしかあるまい」
食糧が乏しい代わりに鉱物資源に恵まれている東国は、短期決戦や突撃に強い。
このバルツィ砦は、両脇にある山の急斜面を利用した堰とも言える構造になっている。そのため、基本的に正面から来る敵に対応すればいい、最高の立地だ。けれど、それもこの戦力差を埋められるほどのものではない。
今も相手が放つ律法士の奇襲でチクリチクリとダメージが蓄積している。油断なく見回していなければ、いつ防衛線に穴が空いてもおかしくなかった。
「こちらの律法士はあと何人いる？」
「昨日の奇襲でしくじって、二十二人になりました。その多くは十歳かそこらの子供ばかりです。彼らも無理やり生産ラインから上げられてきたので、あまり酷使しては後々が――」
「生産ラインなどと言うな。お前が正規騎士と同じになりたくないなら、なおさらである」
「も、申し訳ありません」
精神的に追いつめられて口を滑らせた補佐は、かしこまって頭を下げた。
それと時を同じくして、警笛の音が砦に響く。

死人同然だった兵たちは、心臓を鷲掴みにされたように飛び上がる。ある者は防壁の上から直接に敵を、またある者は物見やぐらにいる伝令兵を見やる。警笛に続く手旗が示すのは、敵に動きありという知らせだ。
どんな陣形がどう動いているかがわかると、ディランは補佐に指示を飛ばした。
「やつらが陣営を離れる時が唯一の機会だ。律法士を半数集め、兵糧、武器庫を狙わせろ。敵は待ってくれぬぞ」
「了解いたしました」
補佐が走り、周囲に指令を伝えていく。仕事をしない癖に情報だけは欲しがる正規騎士にまず伝え、次に隷属騎士へ。続いて市民兵に、指示は流れた。
兵士はすぐさま戦闘態勢につき、陣営を整える。
「なんとしてでも堪えよ。砦戦は我らに分があるが、ここを抜かれれば領土は瞬く間に呑まれるぞ！」
正規騎士団長は威張るように肩で風を切って一際高い防壁まで歩み出ると、高らかに声を上げた。
「死守するのだ。奴隷は元より平民といえども、敵にここを越えられれば未来はない！女は凌辱され、男はよくとも奴隷だ。食い物も何もかも貪り尽くされるぞ！」
恐怖を煽る声を飛ばすだけの正規騎士に、ディランは顔をしかめる。

脅しで働きが期待されるレベルなど、とうに超えている。今の兵士には、勝てると幻想を抱かせたり、生きて帰れるという希望を持たせたりする必要があるのだ。

そうでもしなければ、押し寄せてくる敵を止める力なんて湧くはずがない。

敵の隊列は、ゆっくりと近づいてくる。ぴったり揃った足踏みは地響きにも似て聞こえ、彼らが射程に入るのを待つ射手たちの心を、早くも攻撃しはじめていた。

この数日で見切られた射程のギリギリ外で、行進は止まる。初日はロングボウだけでなく、それに勝るとも劣らないコンパウンドボウのおかげで一泡吹かせることができたが、敵も同じ轍は踏んでくれなかった。

「来た……。もう駄目だ……」

誰かが呟く。それに続いて他の数人も似た言葉を口にする。

すると、彼らの目線の先から何かが走ってきた。それは、オーガと呼ばれる人間の倍ほどの体躯を持った鬼数体と、律法により土石で作られた二メートルほどの巨人だ。

「第一射、放てぇっ！」

正規騎士の言葉で、一斉に矢が放たれる。

総数五百もの矢は雨のごとく降り注ぎ、オーガと土巨人に突き刺さった。それによってオーガの一体は倒れたものの、他は勢いを衰えさせることなく走る。土巨人にいたっては、非生物なので全く効果がない。

「第二射！」

声と共にまた放たれる矢。けれども、倒れるのはやはりオーガだけだ。

地面に突き立った矢の原も蹴り散らして進んだ土巨人は、そのままの勢いで砦の格子扉に体当たりをしてくる。扉は頑丈に作られているが、防壁は大きく揺れた。格子扉は上に持ち上げることも難しそうなほどひしゃげている。こんな攻撃はあと数度も受け止めきれないだろう。

正規騎士は怒り、近くにいる農民兵に叫ぶ。

「貴様ら、手斧とつるはしを持ってあの巨人を壊してこい！　この規模の律法なら相手も一体限りしか扱えん。残る者は次のオーガに備えよ！」

「そ、そんなっ。あいつを相手したやつらはみんな死んで……！」

「黙れっ！」

正規騎士は、震え上がる農民兵たちを防壁の上から突き落した。

地面はさほど硬くない土なので、落下しても命にかかわる怪我はしない。けれども落とされた人々は、恐怖でなかなか動き出せずにいた。

彼らが見上げた先には土巨人がいる。それはのろのろと防壁から距離を取ると、また扉に体当たりをしたり、手近な石を投げたりして射手の邪魔をしていた。

さらには、隙を突いて敵軍のグリフォンがやってくる。砦に魔物や人間を落としてき

たり、槍状の武器を落としてきたりと厄介極まりない。
敵はこうした魔物と律法による攻撃を一波、二波と繰り返し、こちらの各所に生じた綻びを広げる。そしてダメージが十分と見ると、本隊が攻め込んでくるというのが今までの流れだ。
つまり先陣切って辿り着いたこの土巨人から潰し、敵の攻撃に遅滞なく対応しなければ、本隊に蹂躙されてしまう。
突き落とされた兵士は、がたがたと震えながらも武器を持って立ち上がる。生き残りたいなら早々に土巨人を壊して這い上がってこい、と正規騎士たちは叫んでいた。
「う、ぐうっ……。うあぁぁっ！」
彼らは一心不乱に土巨人に武器を打ちつけた。
この土巨人は内部に術者の血を吸わせた核を持つ。それを壊せば倒せるし、復活するおそれもない。だからたとえ雑兵でも、土巨人を倒すことは不可能ではない——と、言われている。
けれども、それが現実的な話かと問われれば、はなはだ疑問だ。
律法で強化された土石にただのつるはしや斧を叩きつけても、損傷は微々たるもの。大の男が全力でぶつけたとして、撥ね返されて衝撃で手が痺れるのが関の山だ。
落とされた奴隷や農民が何人がかりで攻撃しても、結果は同じことだった。

「壊れろ。早く、早くっ……！　早く崩れてくれぇっ……！」
第二陣の魔物が向かってくることに焦燥する一人の男が、半狂乱になりながら土巨人に武器を打ちつける。何度も打ちつけるが、刃が突き立つ気配は一向にしない。それを見かねた別の元農夫の男は、その邪魔な男を押しのけた。
「それじゃダメだ、どけっ！」
じんじんと痛む手で手斧の柄を強く握り直すと、彼は土巨人の関節を狙った。大きな岩だろうと、弱い部分に楔を打ち込めば割れないはずはない。
すると、今まで全ての攻撃を弾いていた土巨人に刃が食い込む。
それを目にした彼らは勝機を見出し、その楔を押し込めようと攻撃を集中させはじめた。
「そうだ、楔を打ち込め！　そのまま崩せ、崩せぇっ!!」
元農夫の男は周囲を焚きつけながら、傍に落ちていた新たな武器を取った。
こんな土くれに殺されてやるほど自分の命は安くない。心の中で啖呵を切った彼は、あらん限りの力を込めて武器を打ちつける。
「ははっ、どう——」
どうだ怪物め、と吐こうとしたその瞬間。
卵が割れる音に似たぐしゃっという音を残し、彼は土巨人の平手に潰された。

土巨人にとっては人も卵も大差ない。人間の頭蓋は、土巨人からすれば気怠く腕を振り、壁にぶつけるだけで潰せるものだ。数瞬前まで彼だったモノは、無事に残った四肢だけをぴくっぴくっと小刻みに痙攣させている。

昨日までに、何人も同じ殺され方をしてきた。その証拠に、壁には似たような血と肉片が無数にこびりついている。

土巨人は無感情に遺体の上を歩く。邪魔者と標的は破壊するという簡単な命令しか入れられていない土の人形は、遺体を風景の一部としか認識できないのだ。

だからこそ、土巨人は現状を簡潔に判断する。

――周囲の人間により、腹部を少々損傷。彼らは無視できない脅威、と認識した。

土巨人はターゲットを砦の正面扉から周囲の人間に切り替え、足踏みをして振り向こうとする。

その最中、土巨人は叩き潰したばかりの人間を期せずして何度か踏んでいた。死んだ直後なので、その刺激に合わせて手足が大きく跳ねる。それはまるで、遺体が痛みを感じているかのようだ。

目の前の光景に、生き残りたちの心は恐怖に染まっていく。

「ひ、ひぃっ。嫌だ。もう嫌だっ！　死にたくない、死にたくないっ。誰か、たす――」

恐怖が極まった一人が転げまわるように逃げ、砦の両脇にある山の斜面を登ろうと手

をかけたその瞬間――彼の首に正規騎士が放った一本の矢が突き刺さった。

彼は呻き声を上げて、のたうつ。激しく動き回るせいで傷口から溢れた血が気管に入り、血の泡を噴きながらむせていた。

最期は唾液とも血とも知れない泡を吐きつつ、山の斜面に手をかけた姿で絶命した。

「貴様らに逃げ道はない！　いいか、生きたければ自らの手でそれを倒して勝ち取るのだっ！」

そんなことを叫ぶ正規騎士を、生き残りたちは仰ぎ見る。防壁上に立つ正規騎士は、さらに数人を叩き落としてきた。正規騎士はこうして弱者を死地に追いやる上に、役目から逃げようとする者を容赦なく撃ち殺すのだ。

「う、ぅ……くそっ。くそぉぉっ……！」

前任者たちが死に行く様を覚えていた彼らは、恐怖に震えながらがむしゃらに武器を叩きつけるしかなかった。

だが、七人いた人間は土巨人の腕と頭を落とすまでに三人となってしまう。それぞれに人生と、待たせている者や願いがあったはずだが、全ては卵が潰れるような軽さで潰えた。

「ごっ――!?」

その間に第二陣のオーガが砦まで到達してしまったらしい。オーガは木のごとく太い

腕で一人を払い飛ばし、壁に叩きつけた。

また生身が潰れる嫌な音が生じる。腕や背がへし折れ、顔なども潰れかけたそれは、もはや人ではない。それはまだ生きている仲間を見つめると何か言いたかったのか、口を動かしごぼごぼと血の泡を噴き出して、事切れた。

「あ、あ――……」

それを目の前で目撃した女性の農民兵は武器も取りこぼして固まっていた。

「ぎゃっ、やめっ……。助げっ――――」

女性はその声で振り返る。そこには下半身をオーガに掴まれたものがあった。顔面から壁に叩きつけられて、血だかなんだかわからないものを、ぼたぼたと垂らしながら吊り下げられている。

オーガはそれを放り捨て、次の標的として女性を目に映した。

筋骨隆々な体躯。獣のごとく突き出た牙。安価で強いことだけを目的とした装備を無理やりつけられた出で立ち。そんなオーガは人間なんて楽々と殺すことができる。

土巨人とオーガに睨まれた女性に、未来なんてあるはずがなかった。

彼女はあとずさりする途中、動揺で足を絡ませて、思い切りしりもちをついてしまう。

「あ、あはは……。うそ、嘘よ……こんな……」

女性は乾いた笑いを漏らしながら、手足を引きずってあとずさる。

するとすぐに追いつめられ、背が砦の壁に行き当たってしまった。怯えきった彼女はそれにすら、ひっ!? と竦み上がる。

足に力を込めるが、背に当たる砦の壁は少しの後退も許してくれない。壁が動くはずがないことは彼女も理解していたが、それでも手足を動かし続けていた。生きすがりたい本能が、ただただ、そうさせる。

がふっと吐かれたオーガの生臭い息が、女性の髪を舞い上がらせる。それほどまでにオーガとの距離が縮まった時、彼女の感情のタガは外れてしまった。

「い、いやっ……。誰か助けて！　いや、いやぁ！　死にたくないっ！　だれか、だれかぁっ！」

壁に縋りついて叫ぶ。彼女の声は砦にいる多くの人に聞こえていただろう。けれども、助けはない。今、死に直面しているのが彼女というだけで、助けを求めているのは誰もが同じなのだ。

負傷者ばかりで、武器もロクにない。砦の設備はもうぎしぎしと軋みを上げている。今に、敵は勢力を増やして突撃してくるだろう。

そのあとは蹂躙されるしかない。まるで草刈りのように人が薙ぎ払われることだろう。その頃になって身の危険を覚えはじめた正規騎士が、自分たちだけ撤退する――それがこの一戦の結末のはずだ。

ここで戦わされている彼らは何度も思う。こんな状況でどうしてまともでいられようか、と。

「たすけて。たすけてくださいっ。なんでも、なんでもしますから……。どんな扱いでも、いいですから……お願い、です……」

女性は、もう無駄だと理解したのだろう。もしくは、オーガに縋りついて命乞いをした方がマシだと思ったのかもしれない。

血に濡れたオーガと向き合った女性は、嗚咽を漏らしながら祈りはじめた。

しかし、世界は残酷だ。オーガは鉈に似た武器を振り上げているし、土巨人まで手を伸ばしてきている。その上、ついに動きはじめた東国の軍勢は、無数の武器を掲げて一挙に突撃してきた。

目の前で鈍い輝きを放つ凶器たちは、彼女に一縷の希望も与えてはくれなかった。

この戦場には、慈悲も、まともなものもありはしない。

「死にたく、ない……。だれか……」

なら、何に祈ればいい？

彼女は目を閉じた。人が手を差し伸べてくれないのなら、せめて神様にでも祈ろう。

だが、この世界に神様はいない。

この世界の人々は、幾度の戦争や飢餓、疫病に苦しんだ末に神も魔法も奇跡もないのだと、祈ることをやめた。現実の世界とはそういうものだと、自分たちで結論を出したのだ。

――否、そのはずだった。

その時、女性が閉じた目蓋越しに感じていた陽光が、急に陰った。疑問を抱く間もなく、ずん！　と今までに体感したこともない大揺れが起こり、誰もがバランスを崩した。

「な、なに……？」

彼女が目を開けたと同時に、目の前にそびえていた土巨人とオーガは、とてつもなく大きな何かによる一撃で払い飛ばされた。状況に理解が追いつかない彼女は、この場に現れたそれを目に焼きつけることしかできなかった。

一度、二度と瞬きをした末に、ようやく理解する。

この場に現れたのは、見上げるほど巨大な――ドラゴンだった。

山のように巨大な体躯。どんな生物よりも荒々しく、それでいて研ぎ澄まされた美しさのある竜鱗。二万をも超える軍勢を前に何一つ臆さず、悠然と立つその威風堂々とした姿。

そして、その背に跨っている一人の人間。

「猊、下……？」

ふと、誰かが語っていた話を思い出す。

人も、神様も、何もかもが見捨てた時に、救いの手を差し伸べてくれた存在。
涙を流し、全てを諦めかけたその時、どこからか現れ、福音を運んでくれる客人の話だ。
「……死なせてたまるか。怪我人も、苦しんでいる人も。もう誰も殺させやしない」
この場で戦わされていた誰もが求め、そして誰も与えてくれなかった言葉だ。
その力強い言葉を後押しするかのごとく、ドラゴンが啼いた。大気をつんざき大地を揺らすその咆哮に込められた力は、見えない津波となって戦場にある命全てを打った。
そこに刻むものは果たして恐れか、驚きか、安堵か――。それは受けた当人のみぞ知るものだろう。

†

戦場へ降り立った猊下こと風見は、言うだけのことを言うと、緊張の糸が切れてしまったらしい。
ぐぐっと込み上げる吐き気に襲われ、その場で膝を折る。嘔吐せずにアースドラゴンのタマの全力疾走に耐えられる体なんて、彼は持ち合わせていないのだ。
するとすぐに背を撫でてくれる優しい手があった。

「シンゴ様、お加減は大丈夫ですか？」
一緒にタマに乗っていたキュウビが体調を気にかけてくれる。
「ああ、大事はない。けど、とりあえず酔いで吐きそうだ。おえ……」
「あらあら。こんなところで吐いてしまいますと、士気が下がりますわよ？」
風見としては、一刻も早く降りて胸に渦巻いた吐き気から解放されたかったのだが、この状況ではそうもいかないらしい。
本当に身に余る肩書きだ、と風見は猊下という立場が持つネームバリューを恨む。
「うう、キュウビはどうして平然としていられるんだ……」
「うふふ。わたくしはほら、普段から騎乗することに慣れていますから」
余裕の表情でいられるキュウビが心底羨ましかった。
これもひとえに経験の差なのだろうが、その言葉が若干引っかかる。サキュバスの亜種の血を引く彼女の慣れは、別物への騎乗ではなかろうか。深くは追及しない。うやむやのまま永遠の闇に葬っておくためにも、風見は話題を変える。
「なあ、いくらドラゴンでも、この軍勢の前にいたらさすがに危ないよな……？」
風見は青い顔のまま、問いかける。
相手も軍なら律法士を大量に配置しているだろう。それに投石機などの兵器も見えるので、いくら強力無比なタマでもダメージを受けるおそれはある。

タマが戦闘に巻き込まれることを、風見は危惧していた。
だが、キュウビは余裕の微笑で「いいえ」と首を振る。そこに不安など一片もない。
「シンゴ様は『千刃も竜の鱗に劣る』という言葉をご存じですか？」
「いや？」
「そういうことわざがこの世界にはあるのです。これは真っ当な努力では実現が困難なことを指します。竜――特にドラゴンという幻想に対して、あのような有象無象の軍勢では力不足なのです」
「ドラゴンとまともに戦うならもっとたくさんの人数が必要っていうことか？」
「いいえ、数の問題ではございません。質の問題ですわ」
普通の戦力計算からかけ離れた話だ。風見はどうしても納得できず、首を傾げてしまう。
確かにドラゴンの鱗を貫く武器はそうそうない。だが投石機など、衝撃を浸透させうる武器は存在する。戦争の経験が少なからずあるであろうキュウビが知らないはずはない。
しかしながら、彼女の表情はいつになく不敵だ。
「シンゴ様、聞こえますか。彼らはうろたえています。けれど、たかが一頭の魔獣ではないかと侮り、律法や投石で対抗しようとしているのです」

彼女の言う通りだ。
ドラゴンの咆哮で馬が怯えていたものの、敵軍の動きは整いはじめている。軍勢は武器を立てて一斉に地を打ち、「直れぇっ！」の号令で並びを整えた。その練度には恐れ入る。
続いて兵長らしき人が張り上げる声は、この砦付近まで打ち寄せた。
「所詮は一頭だ。何ができよう!?　律法、放てぇっ！」
複数人が似た指示を周囲に飛ばした。
すると軍勢の頭上に五十ほどの魔法陣が浮かぶ。それらは同色で隊列を組んでおり、互いの律法を組み合わせて攻撃を強化しようとしているのがわかった。
それは付加武装を用いた相加術と同じだ。威力を桁違いに上げることもできるし、複雑な効果を作ることもできる。強化した律法が何十とあるのだから、ドラゴンに対して強気なのは理解できた。
けれど、キュウビはそれを鼻で笑う。あの無数の光への評価はたったの一笑だった。
「シンゴ様、ドラゴンを討つのは常に勇者です。有象無象ではございません」
軍勢の幻光が高まる中、キュウビは語る。
伝説や英雄譚では、まさにその通りだ。聖剣をはじめとした武具に選ばれた勇者だけが、ドラゴンを討伐した。

何の天啓も与えられていない人間が挑めばどうなるか。それは一様である。

物語の一節は、ここに再現されようとしていた。

東の軍勢が律法を放とうとしたその時、タマは再び極大の咆哮を上げる。それによって空中に魔法陣が出現した。レッドドラゴンが律法を放った時も、風見は似たものを見ている。

この体躯に比例する巨大な魔法陣だ。人や魔物のものとは紋様が違い、さらに複雑怪奇なそれに風見は目を奪われていた。

だが、ふと気づく。軍勢が描いた魔法陣が、いつの間にか全て消えていたのである。魔法陣は発動と同時に消えるはずだが、もうすでに発動したというわけではない。突然の消失に軍もざわめき、困惑しているようだった。

それを見たキュウビはふふと笑みを深める。

「ドラゴンの律法とは何属性であるか、ご存じではありませんか？」

「属性？　タマはアースドラゴンだから地――」

地属性と言いかけ、風見はハッと気づいた。

律法の属性は計十一種。そのうち一種は、ドラゴンのみが扱える特別な属性で、軍の律法を掻き消し、一吹きの業火で全てを焼き払ったという逸話を聞いたことがあった。

そういうことなのかと視線で確認すると、キュウビは表情のみで答える。

タマが描いた魔法陣はさらに多重に連なり合う。

それと同時に、タマは両前脚を振り上げた。後ろ脚二本で立ち上がると、誰しもが仰ぎ見るその高さから勢いをつけて地面を踏み抜く。

それだけでも地震が起こりそうなものだったが、そこに律法の効果が上乗せされる。タマが脚を叩きつけた拍子に大地が割れた。その隙間から幻光が溢れ、東の軍に至るまでの地面に幾筋もの光の線が走る。それらの光をなぞって発生した衝撃波は間欠泉のごとく噴き出し、東軍に襲いかかった。

硬かったはずの地面に数えきれない亀裂が走り、爆ぜて散る。亀裂はそのまま人馬や投石機まで全てを呑み込んだ。一見すれば土砂崩れに巻きこまれたのではと思われる惨状だ。

「おいおい嘘だろ……」

たった一撃のみで、敵の軍隊は半壊状態になったように見えた。

綺麗に整列していた隊列だったからこそ、タマの律法によって綺麗に食われた様がよくわかる。鎧袖一触と言える光景を前に、風見は目を疑った。

あれでは数百単位の死人が出たのではないだろうか？

そんな言葉が顔に出ていたのだろう、キュウビはこう説明した。

「ご安心を。今の一撃は薄く地面を耕したので派手に見えただけですわ。そもそもあの子は

人の戦闘に介入しないと、ハチが言っていたではありませんか。今のは攻撃されたので、降りかかる火の粉として払っただけに過ぎません。本気ならば全てが消し飛んでいますわ」

風見にはキュウビの言葉が疑わしく思えたのだが、もうもうと立ちこめていた土煙が去ると、確かにその通りだった。誰しもが膝や足が埋まるほどまで割れ目に落ちてはいたものの、倒れたままの人間はいないようだ。

だが、あの地面の様子では、戦列を組み直して押し寄せるのはもう不可能だろう。

「ドラゴン特有の属性である虚数属性は、わたくしたちの律法とは根本的に違うのです。わたくしたちは律法で超常現象を引き起こしますが、虚数属性の律法はその上。超常現象を起こす源を操ります。人や魔物のような有象無象の攻撃は自分の律法に巻き込み、何倍にもして叩き返すのです」

風見がほぅと唸っていると、キュウビは続ける。

「ただし例外はあります。例えば人が付加武装を用いた時に使える相加術は、人と魔物の律法が組み合わさることで性質が変化し、ドラゴンが操れないものになります。しかし、相加術を受けてもドラゴンにとっては致命傷には程遠い。少し痛い程度です。伝説級の武具でなければドラゴンに傷をつけるのも不可能なのは、シンゴ様もすでにご存じのことでしょう。だからこそ、ドラゴンを殺すのは勇者にしか許されないのです」

おわかりいただけましたか？　とキュウビは確認してくる。

「……虚数属性の律法がすごいのは、わかった。とりあえずこっちは頼む。俺は砦の怪我人を見てくる」

「お任せを。敵に賢明な軍師がいるのなら、この状況で攻める無謀はありませんわ。もしこちらへ来るというのなら、わたくしが一つや二つ化かして、今回はお帰りいただきましょう」

この場を離れる旨を伝えるため、風見はタマの頭を抱くようにして捕まえる。名残惜しそうにきゅーんと鳴かれてしまったが、「あとでな」と撫でてあやした。

この子も、殺気を向けられなければ攻撃する気はないらしい。竜の巣でレッドドラゴンのハチが先日言っていた通り、自分に火の粉が降りかからない限りは、人に手出しする気がないのだろう。

キュウビの言う通りならばタマがやられる心配はないし、目を離しても大丈夫そうだ。風見は敵の放ったオーガや土巨人によって攻撃されていた人たちのもとへ向かった。

「大丈夫か？」

「あ……。そのっ……」

まず、砦の大扉の前でへたり込んでいた女性に声をかけた。

彼女は完全に腰が抜けてしまっているらしい。手を伸ばしても、それを掴むことも

できないようだ。よほど怖い思いをしたのだろう。

年は十代後半に見える。風見は彼女の目の前で膝を折ると、落ち着かせるために頭を撫でた。

それから、防壁の上に向かって声をかけてみる。

「おーい、誰か扉を開けてくれないか？　それが無理ならハシゴでもかけてくれ」

すると、隷属騎士の見知った顔が幾人か、防壁の上から身を乗り出してくる。

「カザミ様よね？　他にあんな人はいないよね？」

「カザミの旦那ですかっ!?」

久しぶりの再会ではあるが、談笑している場合ではない。彼らは、門が使えないのですぐにハシゴを用意する、と言って下がっていった。

ハシゴを待つ間、他に生存者がいないかとあたりを見回す。けれどこの女性以外は頭がなかったり、全身の骨が折れていたりと、一目で手遅れだとわかる人たちばかりだ。

「これは、酷いな……」

あと少し到着が早かったらこうはならなかったのではと思うと、胸が痛む。

そこへ、隷属騎士の一人が砦の上から叫んだ。

「どうぞこれで上がってください。敵の攻撃がないうちに！」

「悪いな。俺だけじゃなく他の人もどうにか引き上げてやってくれ！」

風見は物言わぬ屍となった人たちを引きずってくると、ロープをかけ、持ち上げてもらった。

それが終わる頃には女性も歩けるまで回復していたので、一緒にハシゴを上る。

防壁に上がってみれば、近くにいた者たちが走って集まってきた。その先頭に何度か話したことのあるハイドラの隷属騎士を見つけ、風見は遠慮なく問いかける。

「なあ、こっちにはグレンは来ていないのか？」

「副団長は手が放せない任務があるそうで、こちらには来ていません」

そう答えるのは長身で大人の雰囲気が漂う女性だった。

名前は確かシーズといっただろうか。竜の巣への旅に出る時、風見を狙う刺客への囮として働いてくれた一人だったはずと思い出す。

「それじゃあ俺は怪我人を診ておく。クロエたちは医療道具をハイドラで揃えてからすぐに来てくれるはずだ。あと、グレンがいなかったら、グレンによく似た人に頼ればいいってリズから言われたんだけど、誰のことかわかるか？」

「副団長のような方ですか？　となれば一人しかいませんね。少々お待ちください」

シーズが誰かを探しているうちに、どこかに医務室はないかと風見は辺りを見回す。

すると、精悍な顔つきの男が補佐らしき人を付き従えてやってきた。アメリカの逞しい海軍士官や、ナイフもしくはアサルトライフルを武器にジャングルで戦う軍人のごとき風体である。

「ドラゴンに乗ってこられたということは、あなたが噂の猊下とお見受けしても？」

「風見心悟と言います。猊下以外で好きに呼んでください。そんな大仰な呼ばれ方はどうもしっくりこないんです。ところであなたは？」

「申し遅れました。私はディラン。この場で隷属騎士を束ねている者で、かつてのリズ殿と同じ団長を――」

そこへ、ディランの言葉を遮る声があった。

「猊下！　猊下なのですね!?　いやいや、恐れ多くもドラゴンに跨れる人間など、猊下以外にあらせられるはずがない！」

その声を聞いたディランは申し訳なさそうに頭を下げ、道を空けた。その先から、数人の騎士がやってくる。

彼らが身につけた甲冑には傷一つなく、剣は体の一部というよりアクセサリーに見えた。使いこまれた防具と武器を持つ隷属騎士とは違う。

ハイドラの城でも数人ほど見たことがある。彼らは奴隷ではなく、身分が確かな正規騎士だろう。

「猊下、どうかこのような小汚い場所ではなく、中へどうぞ。あなたが来られたならば我々はもう勝ったも同然！　東の蛮族は視界の果てで震えておりますぞ！　このま

ま如何様な命令でもお与えください。きっと私の指示より、よほどよき結果を導くでしょう」

正規騎士たちの中央にいる小太りの男は品のない笑い声を上げる。笑い終えると、「さあさ、こちらへ」と、風見に手で道を示した。

この男は、ハイドラ領主のドニが視察に訪れた時もこのようになると、砦に常勤する隷属騎士はよく知っている。高慢な彼に好き勝手に命令され被害をこうむるのは、いつだって下の立場だった。作戦が上手くいけば命令がよかったのだと恥じらいもなくおごり、失敗すれば兵が愚図だったのだとののしる。この男によって指揮が誰かに託される時は大抵ロクなことがなかった。

風見と初対面の市民兵やこの砦の隷属騎士は、風見を見極めるべく動向に注目する。風見もまたドニや正規騎士と同じタイプなのではと疑っていた。

正規騎士と自分たちのどちら側の人間なのかと、彼らは風見に瞳で問いかける。それを察した風見は、笑顔で正規騎士の申し出を受けた。

「ありがとうございます。じゃあ、ディランさん、重傷者から部屋の中に運んでください。俺は怪我人の治療くらいしかできないから、戦闘のことはあそこにいる狐耳のキュウビや、もうすぐここへ来るリズと相談して決めてほしい。それからクロエって白服の子が来たら、俺のところへ案内してほしい。頼めますか？」

ディランはその言葉を聞くと、にやりと口を緩ませた。

「お任せいただけるのですか。ではこのディラン、ご期待に添うよう働く所存です」

彼もまた、先ほどまでは風見を疑っていたのだろう。しかし今の言葉で、本当に噂通り――ハイドラの隷属騎士が語る通りまっとうな人物だと理解したようだ。

「では怪我人を会議室へ。処置に必要と思われる台なども運びこむのだ！」

小太りの騎士が戸惑っているうちにディランは声を上げ、手の空いている者に患者を運ばせようとする。

途端、自分を差し置いて話を進めようとするディランに、小太りの騎士が食ってかかった。

「なっ、何を勝手に命令しておるか、貴様！」

「すみません。それについては俺が早速頼んだからでしょう」

「げ、猊下っ、このような者よりも――」

「知人によると、こういうのは現場で動く人の方が的確に指示できるらしいです。申し訳ないですが、怪我人は一分一秒を争うので急がせてもらいます。もし何か不都合があるのでしたら、全て俺に回してください。そういう状況も加味して動きたいと思います」

正規騎士と古強者の気配を漂わせるディランのどちらが有能そうかは、比べるべくも

ない。風見はそれ以上、小太りの正規騎士の相手をしなかった。

――さあ、ここから全てを覆していかなければならない。

風見は改めて周囲を見回す。じっくりと観察し、現状を把握した彼は意を決した。

――こんな時、物語の英雄はどうしていただろうか？

それを思い描いた風見は深呼吸し、「ちゅうもーくっ!!」と声の限り叫んだ。

期待や不安でどよめいていた周囲が、瞬く間に静まる。

「悪いけど、俺はみんなをここで楽にさせる気はない。いいか、周りをよく見てみろ。何が見える？」

そこにあるのは、風見を取り囲む市民や隷属騎士の人垣。その外側や壁際には、負傷のせいで立つことが困難な人が散見される。辛そうに、苦しそうに、体を蝕む痛みに顔をしかめていた。

「見ての通り、みんな苦しんでる。けどな、誰か一人でも死にたがっているやつはいるか？　今ここで楽になりたがっているやつはいるか？　いないだろ!?」

先ほどの女性と同じだ。誰もが生きたがっている。苦しかろうが、こんなところでは死にたくないと表情ににじみ出ていた。

だから、それを見捨てるわけにはいかない、と風見は声を張る。

「知り合いだけじゃない。俺は手の届く範囲にある命を見捨てる気はない。俺はできる限りのことをするつもりだ！　だけど、限界はある。手の届かない範囲のことはどうしようもない。だからみんなにも働いてもらう。見えるだろ、倒れている仲間が。その人を俺の見えるところまで連れてくること、それを俺がどうにかするまで守ることは、周りのみんなにしかできないことだ。いいか、諦めるな。ここで命を捨てるなんてもったいないことだけは、させないからな！　みんな、今ここで死ねるとは思うな！」

そうして、風見は言葉を伝えきった。彼はそれ以上何も言わず、シーズに案内を求めるとすぐに怪我人が集まる部屋に走っていった。

風見が去ると、戦士たちも一気に働きはじめる。

それはまるで、滞っていた血液が巡り出すような変化だった。人々はてきぱきと動き、砦の補給や整列も、兵長の指示によって正されていく。

「勝て、るのか……？　生き残れるのか……？」

重傷を負って座り込んだ兵がそんな声を漏らす。

見捨てる気はないという風見の言葉を、士気向上の呪文として兵長たちが部下へ知らせ伝える。兵たちは皆、ドラゴンが悠然と敵の軍勢を阻む様を見た。

あれだけ自分たちを苦しめたはずの軍勢は、今やヘビに睨まれたカエルと化している。処置もなく砦の至るところで呻きながら死を待っていた怪我人は、次々と治療に運ばれ

ていく。

兵士たちの心の中で、救国の伝説が蘇った。

死人のようだった兵たちの胸に、生気と士気が湧き上がってくる。ドラゴンと、それに騎乗できる生きた伝説が味方についてくれるのだ。今さら我らに負けなどあろうか。

そんな彼らを後押しするように、巨大な飛竜が砦の真上に飛来した。

飛竜の上から、女性たちの声が聞こえてくる。

「なんだ、存外持ち堪えているようだね」

「そちらは任せます。私は風見様の方を！」

「了解だ。クイナ、お前は私について来い。シンゴがいる後方は私たちで守るよ」

「は、はいっ……！」

飛竜からは長大な太刀を肩に担いだ元ハイドラ隷属騎士団長と白服が飛び降り、魔石が輝くバンカーシールドを手にした少女もあとに続いた。

この砦で、たった数人が増えただけだ。けれども、兵たちは数の不利などものともしない神の助力を受けた心地さえ抱くのだった。

†

「……野戦病院だな」

大きな部屋に次々と運びこまれる怪我人を見て、風見はそう呟いた。元の世界の戦争ドラマで見た光景と、そのまま重なる。

手足だけでなく頭部にも、包帯を手荒く巻かれている人がたくさんいた。包帯は血を吸って赤黒く変色しているし、多くの患者は息も絶え絶えだ。

まだ声を出す余裕がある人は包帯が剥がれるのも構わず、「助けて、苦しい……」と風見の袖を掴もうとしてきた。けれどその手には力が残っていない。怪我人はその代わりに頭頂から頬にかけて巻かれた包帯の隙間から、視線で訴えかけてきた。

「ああ、全力を尽くすから待っていてくれ」

風見はその手を力強く握り返すと、部屋を見回す。

彼らはまだ一刻を争うレベルではない人たちだ。適切に治療すれば命の危険はないだろう。

問題は、呻くことさえできずに昏倒している人である。

しかし、そんな人たちに限って傷が大きくない。風見はその不自然さに首を捻った。

（なんでだ……？）

改めて確かめると、重傷者の傷はどれも血が乾ききっていない新鮮なものだとわかった。彼らはこの半日以内に負傷した人ばかりらしい。

では、昨日以前に重傷を負った人間はどうなったのだろうか？

その答えは考えるまでもなかった。

深い傷を負った人々は治療の術なしと判断され、放置されて死んだのだ。昏倒している彼らは、昨日以前に負った傷が小さかったおかげで運よくまだ息があるが、細菌に体を侵されて死にかけているのである。

風見は先ほど、タマの上から砦の外で山のように積まれていた何かを見た。その正体を知りたくはなかったが、もう目を逸らせないだろう。

「そういう世界、なんだよな……」

風見は、ぽつりと呟く。

壮絶の一言に尽きる。いくら医療経験が長い人間でも、息を呑んでしまうだろう。この場では、素人も玄人も関係ない。心情的にも、実力的にもだ。

縫合をはじめとした経験による医療技術は確かに大切だが、彼らはそれのみでは救えない。このような状況に対しては、前もった備えが不可欠である。

この状況を覆す大前提を確かめるため、風見はつい今しがた到着したクロエに問いかけた。

「クロエ、教会に頼んでいた抗生物質はどうなった？」

「は、はい。いくらかは出来上がっていました。しかしどれもまだ試作段階で、風見様に効能を確かめてもらおうとおっしゃっていたのですが――」

「構わない。それで助からなきゃ敗血症を患って死ぬだけだ」

惨状に竦みかけたクロエから抗生物質を受け取る。薬瓶は手に収まるほどの大きさだ。これだけの人数をこの量でまかないきれるかどうか、酷く怪しい。

「この症状は、そんなに酷いのですか？」

「毒が増殖しながら全身をぐるぐる巡っている状態みたいなもんだよ」

通常は免疫が働いているので、細菌が血中を流れることはない。

しかしあまりに免疫能力が下がったり、手術や大きな傷によって汚染物が体内に残されたりすると、組織や血管が細菌に侵されることがある。

その細菌は最悪の場合、全身に病巣を作る。また、抗体が細菌に反応して塊を作り、毛細血管の各所で詰まって血管を破壊することもある。特に肺や腎臓などの血管が密な場所では、それが顕著だ。

それだけではない。

細菌の毒素や過剰な免疫反応のせいで弱った血管は、配水管の破損のごとく全身で水

分を漏らすようになる。いわゆる、むくみの状態だ。その結果に起こる臓器の機能不全はもちろん、むくんだことによる圧迫自体も新たな害を引き起こす要因となる。

それらが脳で起これば、神経症状や致命的な症状に、肺で起これば呼吸困難に、肝臓や腎臓で起これば、毒素の処理能力低下に繋がっていく。

その他にも挙げればきりがないほど、全身で重大な疾患を引き起こすのだ。

現代日本の医療をもってしても、敗血症は治療が難しい。軽度でも一割、重度では四割が死ぬと言われているので、この世界での治療は言わずもがなである。

風見がそう説明すると、いつもは快活な返事をするクロエも表情を曇らせた。医療について勉強してきた彼女は、事の重大さが理解できたのだろう。

惨状を目にして固まる彼女に、風見は迷いのない指示を飛ばした。

「まずその薬が本当に効くかどうかを、調べないといけない。俺が傷から病原菌を取る間に、抗生物質を三倍、九倍、二十七倍と段階的に希釈しておいてくれ。長い戦いになるだろうし、クロエはできる限り他の人を使って体力をなるべく温存するように心がけてほしい」

「私は大丈夫です。風見様の采配でいくらでもお使いください！」

クロエは嬉々としてそう言ってくれるものの、彼女の能力は稀有で他に使える者はいない。それなのに、患者は部屋に入りきらないくらいにいるのだ。

近場の兵士に患者の正確な数を調べてもらうと、敗血症に近しい症状は十六名。放っておけば、重度の敗血症に発展しそうな人が二十五名。そしてこの十二時間以内に負傷をして、止血縫合と消毒を待つのが百余名だという。

（これを実質二人でさばかなきゃならないのか……。眩暈がするな）

処置が終わるよりも、自分の限界を超えて倒れる方が早そうだ。

特にクロエは律法を使って精神力がすり減るので、なおさらだろう。止血ではクロエの律法が欠かせないので、それ以外の処置はできる限り風見の技術でなんとかするしかない。

クロエが抗生物質を希釈する傍ら、風見は周囲に声をかける。

「一番酷そうなのは誰だ？」

「猊下、こちらかと思います！」

近くにいた子供の兵士が返事をする。

最初の患者は女性だった。風見は体に巻かれた包帯を解き、すぐに怪我を確かめた。

鋭利な刃物でバッサリと袈裟斬り――というよりは鈍い刃物で無理やり抉り切られた傷だ。中世の剣による傷は、こういうものになることが多かったらしい。

潰れた組織は固まりかけた血と一緒になって黒ずみ、壊死している。半透明な浸出物と膿も流れており、正視に耐えない。

クロエや子供の兵士は顔を歪めた。そんな中、風見はすぐに指示を飛ばす。

一度止まると彼らは動けなくなってしまうだろう。ここは無心になって動いてもらわねばならない。

「処置する順序を決めておいてくれ。次の患者には前もってエーテルで麻酔をかけてもらいたいから、俺のやり方を見て覚えてくれ。この処置は難しくない。袋に入れて気化したものを吸わせるだけだ。唇が紫になったり、呼吸が弱くなったらエーテルの袋を口元から離せばいい。呼吸停止をした時はすぐに俺を呼んでくれ。次にクロエ！」

「はいっ！」

「さっき指示した培養を頼む。どのくらいの希釈まで細菌が増えないか、これで調べてくれ」

風見は患者から採血すると、寒天培地を敷いた複数のシャーレに血を塗布する。

必ずしも血液から細菌が培養できるとは限らないが、本来は無菌状態の血液から培養できたのなら、症状は敗血症で確定だ。風見は希釈してもらった抗生物質をそれぞれの倍率ごとに紙片に染みこませ、寒天の上に載せていく。

抗生物質が働いていれば、紙の周囲は細菌が増殖しない。その結果でどの希釈倍率まで有効かを調べるのだ。実際には薬剤感受性試験や、ディスク法などと呼ばれている。

机にはずらりと寒天培地が並ぶ。三倍、九倍、二十七倍――と複数の希釈倍率があ

る上に、同じものを数人分という具合だ。

「思っていた以上に数がありますね」

その数が予想以上だったのだろう。クロエは息を呑んでいた。

患者への手当てを始めていた風見は、手を一時的に止め、クロエの方を振り返る。

「悪い。ただ、これだけは調べないと無意味な治療をしちゃうかもしれないんだ。調べ切れるか？」

敗血症は細菌が引き起こす。しかし細菌は多様で、たとえ同じ環境でもどんな種類が害を及ぼしているかはわからない。それらへの薬の効き具合を試すため、サンプルが増えているのだ。

「この程度ならまだ大丈夫です。私はあなたのお付きなのですから、力を役立ててください」

クロエは風見の言葉に頷くと、よし、と気張って培養促進の律法を始めた。

律法は連続で扱えばそれだけ精神力が削られる。十回も繰り返したら全力で持久走をするようなものだ。

「……ふぅ。ようやく――」

しばらくして全てを調べ終えたクロエは、ふらりと立ち眩みを起こしてしまった。

それに気づいた風見が慌てて肩を支える。彼女から返ってくるのは空元気の笑みだ。

彼女は風見に体重を預けたまま、彼の手にそっと自分の手を添えて息を整える。
「……試験の方は無事に終わりました。ご心配ありがとうございます」
「ありがとう。体調が回復するまでしばらく休んでくれ」
風見は兵士が持ってきてくれた椅子にクロエを座らせる。彼女は辛そうなままだったが、すぐに結果の報告を始めた。
「風見様、八十一倍の希釈までは効果があるようです」
「ありがとう、それがわかっただけでも大助かりだ。俺の世界でだって、こんなに早く検査できない。じゃあ、俺は治療に行ってくる」
「はい。拝見させていただきます」
クロエは額に汗をかいていた。風見はそれを丁寧に拭うともう一度労い、自分の戦場に向かう。
周囲の兵士は本物の戦場のように起立して、与えられるであろう指示を待ち構えていた。
風見は大きな声を上げる。
「今から処置を始める。用意した注射器をありったけ並べておいてくれ。それから、お湯をじゃんじゃん沸かして人肌くらいに冷ましておいてくれ。あとは俺が止血や縫合をする時は、近くに松明を一つ置いてほしい。焦らず、迅速に頼む！」

「「はいっ！」」
熟達したスタッフさながらに声が一致した。彼らは即座に動きはじめる。
それを見送った風見も治療準備を始めた。希釈した抗生物質を注射器に充填し、数人に皮下注射していく。これはまだ処置ではない。せめてもの最終確認だ。
これでアルコールのパッチテストやツベルクリン注射のように赤く腫れたら、アレルギー反応があるということで、抗生物質の投与はかなり危険になってしまう。その時は別の手段を探すか、危険を顧みず処置をするか、意を決しなければならない。
「誰か、この人の容体をしばらく観察しておいてくれ」
「了解いたしました！」
風見は反応がないのを祈りつつ、経過を見守らせた。
「……こういう時のために、道具と人員の拡充はもっと必要だな」
働いてくれる彼らに不満があるわけではない。とはいえ、この状況にいろいろな不足を痛感しているのは間違いなかった。
例えば、注射針。それらは採血用と見紛うくらいに太い針しかない。しかも本数が限られているので、煮沸消毒を挟んでの使い回しだ。現代日本では許されない行為だが、使い回さなければ救いようのない状況なので、致し方ない。
医薬品は、ハイドラの街のギルドに作ってもらいはじめたばかりだ。今後は商人であ

るクイナの父の仲介を頼みにしつつ、全土に手を広げて増産と改良をする必要があるだろう。

止血を必要とする人の応急処置をしながら、風見はそんなことを思案する。

その間に数分が経過したらしい。先ほどの観察結果が出たようで、兵士が報告にやって来る。

「猊下、先ほどの注射には特に変化が見受けられません」

「わかった。じゃあ敗血症への処置も始める。みんな、これからが本番だぞ。気を引き締めてやってくれ」

呼びかけてみれば、周囲からはっきりとした返事があった。

指示通りにエーテル麻酔がかけられた患者のもとへ駆けつけると、風見は皮膚をつねって麻酔のかかり具合を確認する。

この患者は先ほど傷口から菌を採取させてもらった女性である。

こういう敗血症患者の場合、対処のガイドラインが決められている。まず感染源と思われる細菌に効果がある抗生物質を選択し、投与するのが最初の仕事だ。ここは処置が早ければ早いほどいい。

あとは低血圧、全身の浮腫、各臓器の機能低下など、発生する症状に合わせた処置をおこなっていく。要するに、細菌の元を叩いたら、数ある症状に対して正常に戻すための処置をもぐら叩きのように延々と繰り返すのだ。

すると、風見の大変さを察したクロエがイスから立ち上がった。

「風見様、私はもう大丈夫ですので、何かお手伝いできることはありませんか？」

「無理はしないでくれ。クロエには傷の処置でも頼ることになる」

「律法を使わないのであれば大丈夫です。どうか指示を出してください」

風見はしばし黙り込んだ。

確かに医学の心得がある助手の手は欲しいところだ。兵士には希釈なら任せられるものの、輸液の作成や他の薬の準備を任せるには無理がある。

「……ありがとう、頼む。アルミラージの治療の時に輸液を作ったよな？　あれと同じ要領で、濃いめの食塩水を大量に作っておいてくれ。この人数なら十リットル程度は必要だと思う」

風見は以前、幻獣アルミラージの下痢を治療する時に輸液用のセットを作っていた。それを思い出し、クロエは頷く。

「生理食塩水ではなく濃いものですね？　わかりました。他にできることはありませんか？」

「あと必要な薬は、最低三つだな。とりあえず血圧を上げる薬と利尿剤の二つからいこう。マンドレイクから作った興奮剤、それから利尿作用のある薬はあるか？」

「はい。全員分は無理ですが、三十人分くらいならあるかと思います」
「それでいい。用意してくれ」
この辺りはこちらの世界の生薬に長けたクロエの領分だ。彼女は力強く頷いてくれた。
「さて、残るは一つだな」
風見は頭の中で敗血症への対処と行動をまとめる。
まず、症状の悪化防止――抗生物質の注射で可能。
低下した血圧の対処――輸液と興奮剤で可能。
臓器も含めた全身で起きている浮腫の対処――利尿薬で可能。
そして最後に一つ、毛細血管で起こる血栓の対処だ。これは敗血症の治療において欠かせない。
「経験が活きたな」
この世界に来て、できる限り手広く薬を作ろうとしたことはやはり正解だった、と風見は笑みを作る。今回必須となるそれは以前、ある魔物に毒として使ったものだ。これがあるのとないのとでは大違いになる。
風見は、次々と薬を用意してくれるクロエに呼びかけた。
「クロエ。火鼠と戦った時のことを覚えているか？」
「はい、もちろんです。風見様がクローバーの一種を殺鼠剤として使った時のことですね」

「そうだ。あれも用意してくれ。あの時は毒として使ったけど、今回は違う。あの薬の『血栓を作らせない』って効果は、この敗血症の治療では必要不可欠だ」
血中に細菌という大量の異物がいるため、敗血症では血栓が非常にできやすい。しかしあの抗凝固剤があれば脳などの重要な臓器の障害を予防できるのだから、どれだけ重要かは明白だ。
――今までに作った医療器具や薬、この場で用意できるものは揃った。あとは風見が頭に描いたもぐら叩きを実践するのみである。
「風見様、この患者への輸液はどのくらいにすればいいでしょうか？」
「少しでいい。そのために生理食塩水じゃなく、濃いものを作ってもらったんだ」
「え？　出血で血が減って血圧が足りないから、せめて圧力を取り戻させるために輸液をするのですよね。少しでいいのですか？」
「ああ。本当は正常な体液と同じ成分をどばどば入れて、利尿薬でどばどば出させることで体液を正常な状態に戻したいところだ。でも、敗血症では全身に巡った細菌が排出機能も弱めているから、これ以上、酷使させるわけにはいかない。だから代わりに濃いものを血管に入れる」
風見がそう説明してみるものの、クロエは眉を寄せて考え込んでいる。

「え、ええと、つまりこれはどういうためのものでしょう……？」
「つまり、血管から組織ににじみ出た水を血管に戻すための特殊な一手だ。普通の症状では使わない」
「な、なるほど……！」
今はその結論さえ理解していればいい、と言い聞かされたクロエはひとまず頷き、輸液を革袋に詰めはじめた。
風見はその間に輸液のための準備をする。
「針はもう余ってないから、またカテーテルでやるしかないな」
針のかわりに、血管に入るホースであるカテーテルで輸液することになる。
設備不足が本当に深刻だ。風見は周囲の士気を気にしながらも、わずかに歯噛みする。
元の世界の現代医学は、クロエの律法やグランドオークの能力のおかげでなんとか再現できるが、その間の細々とした労力が惜しまれる。このタイムロスが患者の生死に関わるのは明らかだ。
風見は作業をなるべく急ぎながら、患者の皮膚をメスで切開して静脈を露出させる。
彼はその静脈に小さな切り込みを入れ、カテーテルを挿入すると、輸液やマンドレイクで作った昇圧薬などが詰められた革袋のパックを繋げた。
止血と消毒。抗生物質や様々な薬の投与と輸液――。これだけの処置をこなしたら、

あとは人を替えて、その繰り返しだ。
だが、一人数分で処置を済ませても、二十人いれば一時間はかかってしまう。何人もの人が時限爆弾を抱えているような状況だ。どんなに早く処置を終えても、時間が惜しくて堪らない。
風見は焦りを抑え、些細な医療ミスを起こさないために一つ一つを確実にこなす。
「猊下、彼の出血が包帯ではどうにも止まらないのですが――」
「いつ怪我した人だっ!?」
「先ほどの戦闘でグリフォンから投下された刃で負傷したとのことです」
「わかった。圧迫して止血しながら待っていてくれ！」
一刻も早く敗血症対策をしなければいけない患者がいる一方、急患も出てくる。風見は重症の十六人にひとまず抗生物質を注射すると、急患を相手に止血の縫合を始めた。
だがいくら上手く回しても、一人では物理的な限界がある。
終いには普段から衛生兵として活躍していた数人とクロエが注射を覚え、それぞれ抗生物質の投与を始めるようになっていた。
衛生兵が薬の投与をする合間に、風見はくまなく患者の対処をする。流血する急患が運びこまれた時には、クロエの律法も用いて血管を縫合し、次の患者へ――
まさに戦場の様相で、治療は続いた。薬という武器がある限り、休みなく戦い続ける。

立ち読みサンプルはここまで

問題は、敗血症患者の半数をさばいた時には、抗生物質の残りが二割を切っていたことだった。

†

風見が医療従事者としての本分を全うしている中、リズはハイドラの隷属騎士団長であった時と同じくバルツィ砦の隷属騎士団長ディランと肩を並べていた。その傍にはキュウビとクイナもいる。

防壁上から敵軍を見つめて話す二人の議題は、敵がどう出てくるかということだ。

「リズ殿、やつらはすぐにでも動くと思われるか？」

「戦略なんぞは私の領分じゃないからよくわからんよ。ただ、この状況で末端に下調べもさせずに動くのは、バカのすることだと思うね。……自分で言っておいてなんだが、こんな意見を参考にするのも、どうかと思うよ？」

「女の勘はよく当たるという。それに、最前線の空気はリズ殿の方がよく知っている。聞いておいても損はなかろう」

もっともらしい言葉を返してくるディランに対し、リズは肩を竦めた。

リズがハイドラの隷属騎士団で団長に任命されたのは、二年前。それより以前からこの砦に派兵された経験があるリズは、ここで彼らと十数回肩を並べたことになっている。常に最前線での戦闘や奇襲などをこなしてきたため、彼からの信頼はかなりのものらしい。

けれども、このディランとて戦場の空気には慣れているだろう。

元を辿れば、彼は傭兵崩れの奴隷だ。彼の指示は前線を上手く動かしてくれる。今までのリズの活躍も、彼の指示があったからこそだった。

面倒臭い考え事が嫌いなリズは、ひとまず自分の得手を提案する。

「あんなことをされたあとだ。ドラゴンが正面にいる限りは手を出してくるとは思えん。とりあえず、私は敵の密偵と刺客を殺して回ろうか？」

「その提案も魅力的だが、引け腰の敵に打って出るのもいいな。さて、どうしたものか」

つい数刻前までの危機的状況とは打って変わった贅沢な悩みに、ディランは口元を緩ませた。

タマに一撃を見舞われたあと、敵である東国の軍勢は完全に勢いを失った。隊列が崩れたところにこちらの矢が降り注ぎ、慌てふためいて後退。その時に失った戦力が大きかったらしく、今は矢が届かない位置から睨んでくるだけだ。ちなみにタマは砦の前に鎮座し、居眠り中である。